

甲塚古墳出土遺物重要文化財指定記念シンポジウム

# 『よみがえる甲塚古墳』

～甲塚古墳の発掘調査によってわかったこと～



重要文化財 人物埴輪

下野市教育委員会



## ごあいさつ

下野市とその周辺地域の思川・姿川流域には、5世紀末から7世紀初め頃まで下毛野を代表する大型の古墳や、多くの古墳群が築造されます。7世紀の終わり頃には下野薬師寺が建立され、その後の奈良時代には下野国分寺・尼寺が建立されます。このように古代において東国の重要な地域であったことから、当地域を「東の飛鳥」と呼称しております。

甲塚古墳は、これら古墳群のなかに6世紀後半頃築造されました。平成16年度の調査では、馬形埴輪や機織形埴輪をはじめ、多くの形象埴輪や土器群が出土しました。遺存状態が良好だったため、古墳築造時に置かれた位置や方向が復元できる貴重な資料となりました。

このたび、甲塚古墳の出土遺物97点が学術的重要性を認められ、重要文化財の指定を受けました。これを記念し、甲塚古墳の調査や出土した遺物などから、どのようなことがわかったのかを、市民の皆様をはじめ多くの皆様に知って頂く機会になればとシンポジウムを企画いたしました。

シンポジウムの開催にあたり、多大なるご支援とご協力を頂きました関係機関ならびに関係各位に心より感謝申し上げます。ごあいさつといたします。

平成29年11月

下野市長 広瀬 寿雄

甲塚古墳出土遺物重要文化財指定記念シンポジウム

『よみがえる甲塚古墳』

～甲塚古墳の発掘調査によってわかったこと～

13：00 開 会

13：00～13：10 主催者挨拶

13：15～13：35

●甲塚古墳の発掘調査について

下野市教育委員会 木村 友則

13：35～13：55

●甲塚古墳から読み解くしもつけ地域首長連合

日本考古学協会員 小森 哲也 氏

13：55～14：05 休 憩

14：05～14：25

●甲塚古墳出土の馬形埴輪について

早稲田大学 井上 裕一 氏

14：25～14：55

●甲塚古墳の埴輪群像における被葬者像について

東京学芸大学教授 日高 慎 氏

14：55～15：25

●甲塚古墳出土遺物の重要文化財指定について

文化庁文化財部美術学芸課 考古資料部門

文化財調査官 横須賀倫達 氏

15：25～15：35 休 憩

15：35～16：15

●シンポジウム甲塚古墳出土遺物からわかったこと

コーディネーター 下野市教育委員会 山口 耕一

16：15～16：20 閉会挨拶

16：20 閉 会

# 目 次

ごあいさつ

日程表

資料集

1. 「甲塚古墳の発掘調査について」

木村 友則 . . . . . 1

2. 「甲塚古墳から読み解くしもつけ地域首長連合」

小森 哲也 . . . . . 5

3. 「甲塚古墳出土の馬形埴輪について」

井上 裕一 . . . . . 11

4. 「甲塚古墳の埴輪群像における被葬者像について」

日高 慎 . . . . . 19

5. 「甲塚古墳出土遺物の重要文化財指定について」

横須賀 倫達 . . . . . 25

# 甲塚古墳の発掘調査について

木村 友則（下野市教育委員会文化財課）

## はじめに

甲塚古墳は、隣接する下野国分寺の僧兵の鎧や兜を埋めたという地元の伝承からその名称が付いたといわれている。

下野市（旧国分寺町）では、国指定史跡下野国分寺跡の史跡整備に伴い、国分寺跡の南西に隣接する甲塚古墳についても併せて整備し、古墳から古代寺院まで地域の歴史に密着した総合的な史跡の活用を図るために、平成16年度に調査をおこなった。

## 1 歴史的な環境

下野市の位置する栃木県南部は、古墳時代後期の大型古墳が県内で最も多く造られた地域である。思川・姿川・田川に沿った台地に古墳が築造され、その分布から後期になって台頭してきた地域首長の支配域が推測できる。甲塚古墳周辺も例外なく古墳時代前期から中期に遡る古墳は確認されておらず、後期に大型古墳の継続的な築造がなされた地域である（第1図）。主要な古墳は、南から摩利支天塚古墳（120m）、琵琶塚古墳（123m）、甲塚古墳（80m）、愛宕塚古墳（78.5m）、山王塚古墳（72m）、丸塚古墳（65m）、吾妻古墳（128m）である。これらの古墳の中で丸塚古墳のみが円墳で、他は前方後円墳である。築造順は、出土遺物などから考えると、摩利支天塚古墳→琵琶塚古墳→吾妻古墳→甲塚古墳→愛宕塚古墳・山王塚古墳→丸塚古墳とみられる。

また、この甲塚古墳周辺は、後の奈良・平安時代に下野国分寺・尼寺、思川対岸に下野国府が配置されるなど、古代下野国の中枢として繁栄した地域となる。

## 2 発掘調査について

墳丘は、明治年間の発掘で十文字に破壊されているため、破壊された範囲、墳形、埴輪の配置確認を目的として調査をおこなった。

その結果、全長80m（推定）、墳丘第1段目外縁径61m（古墳南側は若干張り出す可能性があるがほぼ円形）墳丘第二段目長47m、（後円部径34m・前方部14.5m、前端幅17m）であることが判明した。また、周溝の規模は、墳丘第1段目外縁から周溝外縁までの幅が約15mであることが確認された。墳丘南側が調査区外のため南北の長さは不明だが、東西の周溝を含めた総長は推定で91mになる（第2・3図）。

墳丘第1段目外縁と墳丘第2段目裾部の間には約14m幅の基壇（きだん）と呼ばれる平坦面がある。この基壇面幅のほぼ中央で埴輪列が確認された。この列は後円部中心部付近から半径約24mの同心円上に位置し、墳丘第2段目の前方部裾付近まで続くものの前方部墳丘上には延びない。埴輪列のうち、円筒埴輪が続く箇所は約40cm幅、深さ10～20cmの規模で溝を掘り、溝の底面を平坦に埋め戻し円筒埴輪の底面の高さを合せて設置されていた。後円部西側では、円筒埴輪はほぼ接するように並べられているが、後円部北東部では、40cm～1.2mと間隔が広がることが確認された。

この埴輪列の墳丘西側の括れ部付近から馬形や人物などの形象埴輪が出土した。これらの形象埴輪は、基部が墳丘上に樹立した状態で残存しており、古墳築造当時の配置状況を復元することができた。

主体部から最も遠い位置の形象埴輪は馬形埴輪になる。馬形埴輪は4基あり、馬形埴輪それぞれの間には、約1.5m間隔で円筒埴輪が配されている。主体部寄りの馬形埴輪1、2は飾馬を表現しており、後方に続く馬形埴輪3と馬形埴輪4は裸馬を表現している。馬形埴輪1は壺鏡（つぼあぶみ）と馬鐸（ばたく）を、馬形埴輪2は輪鏡（わあぶみ）と鈴を装着している。また、馬形埴輪1には右側面に横座用の短冊形水平板（足置き）の表現がある。馬形埴輪は4基とも主体部側（前方部方向）に頭を向けている。また、各馬に伴うように男性の埴輪が4基配置されている。他の人物埴輪よりも装飾が少なく、背中に鎌を装備していることから馬曳（うまひき）と想定される。基部から全容まで復元できるものは2基のみであるが、馬形埴輪の左前方（墳丘側）に設置され、顔と体は周溝側を向いていたと推測できる。

馬形埴輪の前方には、他の円筒埴輪より径の大きな円筒埴輪が設置されており、これを挟んで前方に人物埴輪が16基設置されていた。馬形埴輪に近い位置（列後方）から主体部側（前方）に向かって調査順に発番した。人物埴輪1～9が女性を表現したもので、人物埴輪10～16が男性を表現している。これらの人物埴輪は、一部に基部と体部が接合せず、設置方向が不明なものがあるが、人物埴輪7・8以外の人物埴輪は、周溝側（外側）を向いて設置されていた。このほか、人物埴輪3の南東部付近の埴輪列外側の位置で、基部は確認できなかったが盾持ち人の破片がまとまって出土している。人物埴輪列の中で人物7と8が、それぞれ布を織る女性を表現した機織形埴輪である。2基とも機織りする人物が主体部側（前方）に背中を向けている（第4図）。

この形象埴輪列は、墳丘第2段目の西側括れ部付近約12.5mの範囲に設置された。この列の前方には、13基の円筒埴輪が前方部裾部まで設置されている。また、この円筒埴輪外側平坦面上から、約360個体以上の土師器や須恵器の高坏・坏などがまとまって出土した。

#### 4 まとめ

県の発掘調査で周溝北西部が土橋状に掘り残されていることが過去に確認されており（第3図）、ここが古墳への出入口になると想定される。墳丘第1段目は約14m幅で平坦面がほぼ円形に廻り、この平坦面の中央部付近には埴輪列が廻ることも確認された。古墳西側には形象埴輪が設置されており、良好な遺存状態から、築造時における埴輪の配置や方向も明らかになった。

古墳に設置された埴輪群の性格は諸説あるが、甲塚古墳の場合は埴輪列の前方で多量の土器群が出土していることから、墳丘に並べられた形象埴輪列を目にしながら飲食を伴う行為をおこなったことが想定される。この形象埴輪列の意味は今後検討を重ねなければならないが、2種類の機織形埴輪が形象埴輪列の中心付近に配置されることから、機を織るという行為の表現が甲塚古墳の被葬者に重要なものであり、この被葬者が機織りに関わっていた、あるいは統括していた人物であった可能性も想定できる。

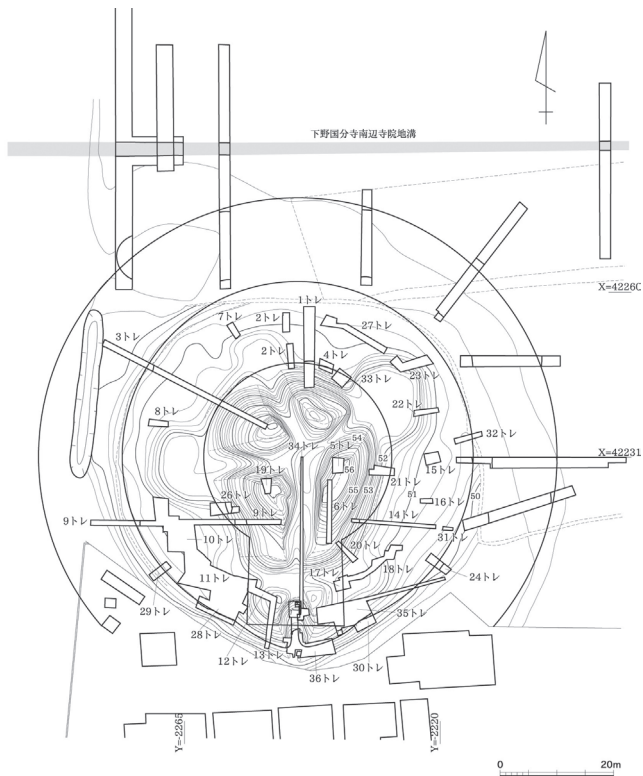
また、甲塚古墳出土の埴輪には彩色が確認できた。出土した馬形埴輪4基は、それぞれ装備や彩色に差異はあるが、共通して全てに白彩が施された痕跡が確認できることから、白馬を表現していたと考えられる。人物埴輪にも彩色が残っており、白地に赤の鹿の子柄など多様な当時の服装が鮮やかに復元できる。また、墳丘自体も墳丘裾部付近からは多くの鹿沼軽石が確認できることから、古墳が築造された当時は墳丘の表面を黄色の土が覆っていたとみられる。この黄色の墳丘を持つ古墳に4色（赤・白・黒・灰）を配した形象埴輪列が並ぶ様相は壮観だったと考えられる。

【参考文献】 下野市教育委員会 2014 『甲塚古墳』

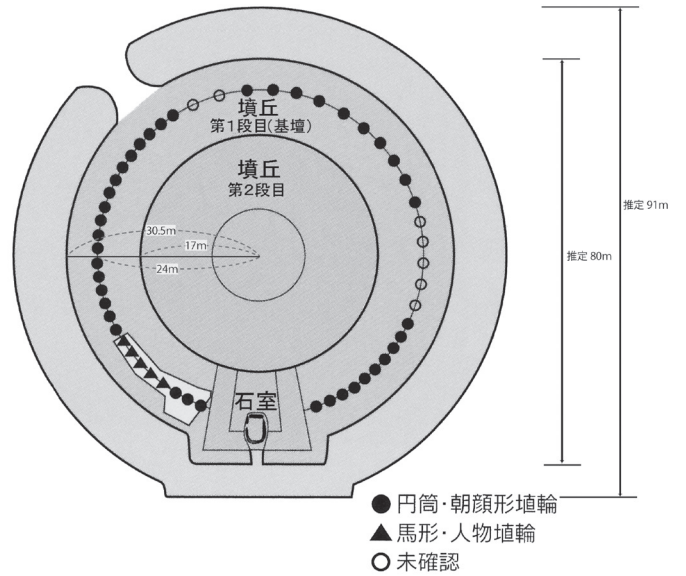


第1図 甲塚古墳周辺遺跡分布図

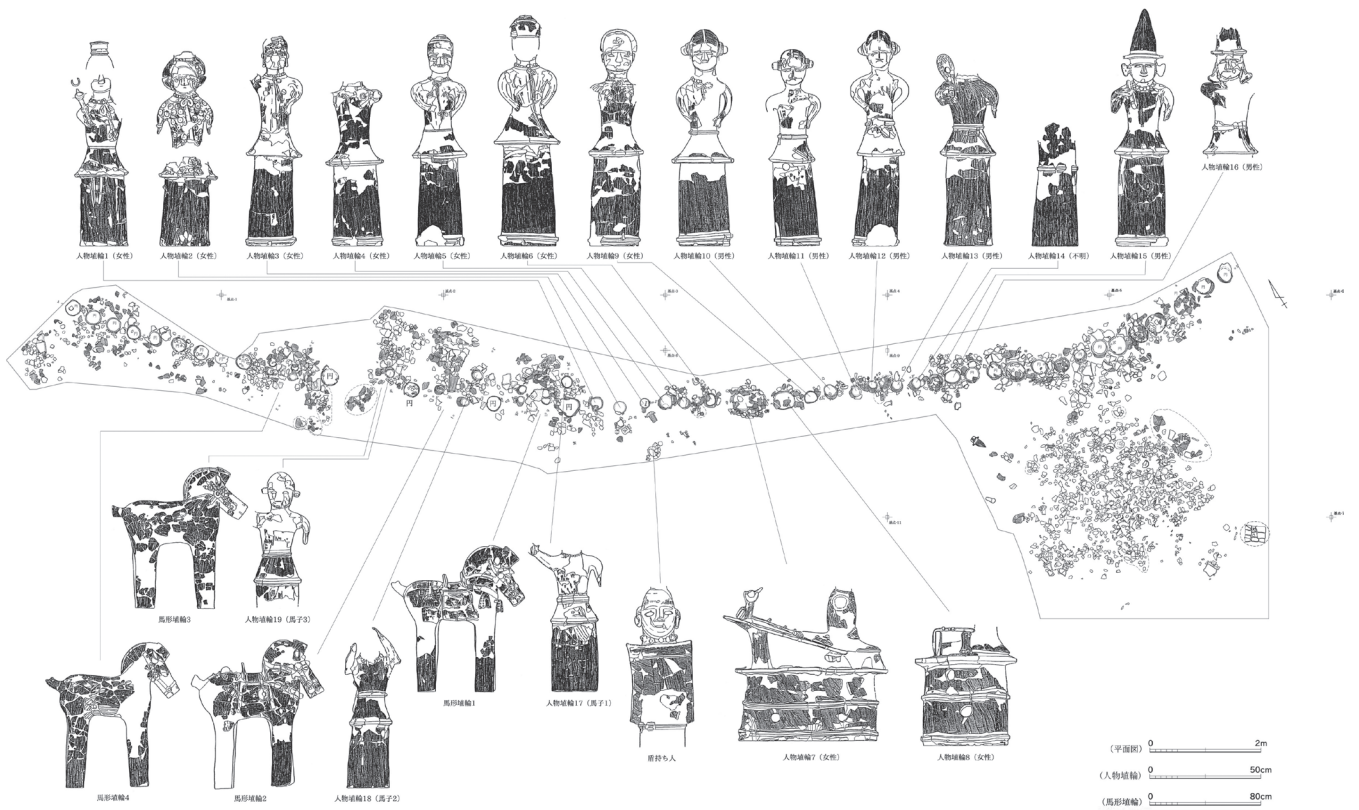




第2図 甲塚古墳全体図



第3図 甲塚古墳模式図



第4図 形象埴輪配置図

# 甲塚古墳から読み解くしもつけ地域首長連合

小森 哲也(日本考古学協会)

## はじめに

これまで出土例のない二種類の機織形埴輪の出土により、全国的に有名になった甲塚古墳。わたしの発表は、まず、甲塚古墳の墳丘や石室の特徴を明らかにする。次に、周辺的大型古墳を含む古墳群と比較しながら、首長(豪族)たちの動きを探り、古墳時代後期の社会について考える。

## 1 甲塚古墳の特徴

### (1) 甲塚古墳の墳丘は二段築成

二段重ねのお供えもちを思い浮かべてみよう。①下段の第一段の高さが低いこと、②第一段の直径が61mあるのに対し、第二段の直径は34mと小さい。①と②の特徴から、墳丘第二段のまわりに幅13.5mの幅の広い平坦面ができる。これを基壇(きだん)とよぶ。盛土量が少ないことに注目して「手抜き」あるいは「省力化」と考える研究者がいる。しかし、甲塚古墳の調査から、この基壇面は埴輪や須恵器による墓まつりが行われていたゾーンであることが明らかになった。大きな調査成果と言える。

### (2) 石室は、後円部ではなく前方部にある

通常はくびれや後円部に造られる。しかし、しもつけ古墳群は独特で、東西主軸の前方後円墳の場合は、前方部南側のくびれ部寄り、甲塚古墳のように南北主軸の場合は、前方部の前端に石室が造られる。

### (3) 大型の凝灰岩切石で造った石室(石棺式石室)

盗掘で破壊されているが、墓室(玄室)は長さ3m、幅2m、高さ1.9mで大きな凝灰岩切石を箱形に組み立てて造られていた。玄室入口は大きな板石を削り貫いている。このような横穴式石室を特に石棺式石室とよぶ。栃木県南部の他、遠く離れた島根県東部、鳥取県西部、熊本県にみられる特徴である。

石棺式石室の変遷は、①側壁が内側に傾く→直立する、②石室の入口部(玄門)の形が長方形→正方形へ、③墓室(玄室)の平面形が長方形→正方形へ、形態が変化する。したがって甲塚古墳の石棺式石室は側壁が内側に傾き、墓室の平面形が長方形なので6世紀後半に位置づけられる。

## 2 下野南部におけるしもつけ古墳群から考える

### Q1 しもつけ型古墳とは?

栃木県の南部、思川および姿川流域(行政区画では、壬生町、下野市、上三川町、小山市、栃木市の一部にあたる)には、大型の前方後円墳および円墳が集中して築造されている。50mを超える前方後円墳が17基、円墳が7基、方墳が1基と下野の最高ランクの首長層の墓域となる。これらの首長墓は、6世紀後半以降、①墳丘の第一段目に低平で幅の広い、いわゆる基壇をもつ、②前方部に石室をもつ、③大型の凝灰岩切石を用いた横穴式石室を内部主体とする、以上3点の特徴を共有している。この3つの要素を備えた古墳を下野型古墳と呼称することが提唱されている(秋元・大橋1988)。

しもつけ古墳群は、南北12km、東西9kmの範囲に分布する古墳群の総称である(秋元2007・君島2011・広瀬2011)。互いに視認できることを群の構成要素とする立場からは、広すぎるとの批判もある。ここでは古墳群が丘陵の縁辺部を中心に築造されていること、そして地形が南流する河川によって区分されていることから、古墳の分布をもとにして6地域に分けてみる。思川の右岸にあたる国府地域、黒川の上流左岸の羽生田地域、その下流左岸の壬生地域、黒川と思川の合流地点からその下流にあたる飯

塚・国分地域、姿川と田川に挟まれた石橋・薬師寺地域、田川左岸の上三川・三王山地域の6地域である。大規模古墳とともに、小規模古墳も多数営まれている特徴を分布図から読み取ることができる。

## Q2 6つの古墳のまとまりは何を表しているの？

3要素を共有するしもつけ古墳群は、6つの地域のうち、どこか一つが飛び抜けて大きい、ということではなく、同じくらいの勢力をもつ豪族が集まって古墳群を形成したと考えてよいだろう。したがって、墓の形、墓室の特徴、墓まつりを共有する6つの首長系譜（代々の豪族のつながり）がたどれる集団が存在したことを示す。つまり、しもつけ古墳群は、6集団による首長連合体制の存在を示している。

### 3 甲塚古墳が語るしもつけ地域首長連合

甲塚古墳がふくまれるしもつけ古墳群の概要を6点にまとめ、歴史的な位置づけについて考える。

- ① 下野型3要素のひとつである基壇は大型古墳から小円墳まで採用する墳丘の造り方であり、背景に特殊な墓の形に対する共通の意識がある。基壇上で行われた墓まつりと関連する。
- ② 基壇は6世紀後半以降、大小の前方後円墳、円墳に採用され、前方後円墳が終わっても大型円墳・方墳に引き継がれる特徴である。同様に引き継がれる下野型石棺式石室とともに、この2つの要素には、近畿地方の王権との関係性を示す前方後円墳の築造とは別の地方の独自性としての意義が予想される。
- ③ 大型の切石を用いた石棺式石室は、大規模古墳に限定され、中・小規模古墳は、河原石を用いた横穴式石室を採用する。
- ④ 前方後円墳の規模は4ランク、円墳は3ランクに分けることができる。この時代には、複雑な階層差があったことを、古墳の形、大きさ、埋葬施設の3つの要素から読み取ることができる。
- ⑤ 栃木県域における6・7世紀において、それぞれの時期において最も大きい古墳が造られたのは、6地域に区分できる古墳群の集合体と考えられるしもつけ古墳群である。
- ⑥ しもつけ古墳群は、6集団による首長連合体制の存在を示している。

しもつけ古墳群という墓域に集う最有力首長層は、連帯感を強め、安定した持続可能な社会をつくる目的で、同じ墓まつりの場（基壇）と墓室（石棺式石室）をもつ古墳を築造していた。メンバーシップを表明することは、配下の者も含め、墓まつりは、人と人のつながり、地域の連帯感、そして地域と地域の連携をより強固にする重要な政（まつりごと）であったのである。

墳形、墳丘規模、埋葬施設から甲塚古墳に埋葬された人物に思いを巡らせてみると、しもつけ古墳群を形成した6勢力による首長連合体制の有力構成メンバーであり、6世紀後半段階に活躍した豪族の一人と考えられる。前方部が短い帆立貝形の墳丘形態を重視すれば、トップではなく、ナンバー2の地位にあった人物であろう。

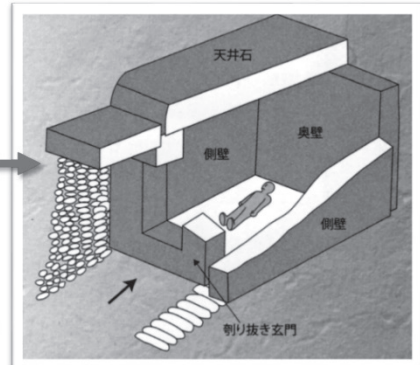
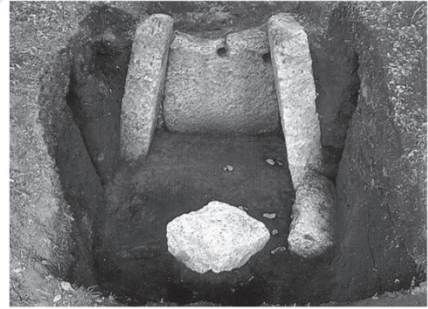
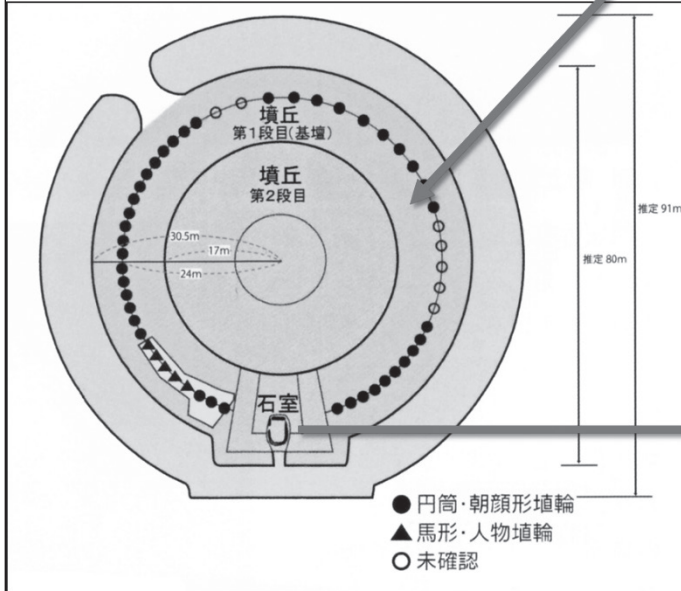
ただし、80mという規模を考えるとトップと肩を並べるような相当の有力者であったことは想像に難くない。その力の根源は何だったのか？埴輪の検討により、この人物の情報がより豊かになると思われるが、この具体的な解明については、当日の登壇者のそれぞれの発表内容とシンポジウム成果をワクワクしながら楽しみに待ちたい。

#### 【参考文献】

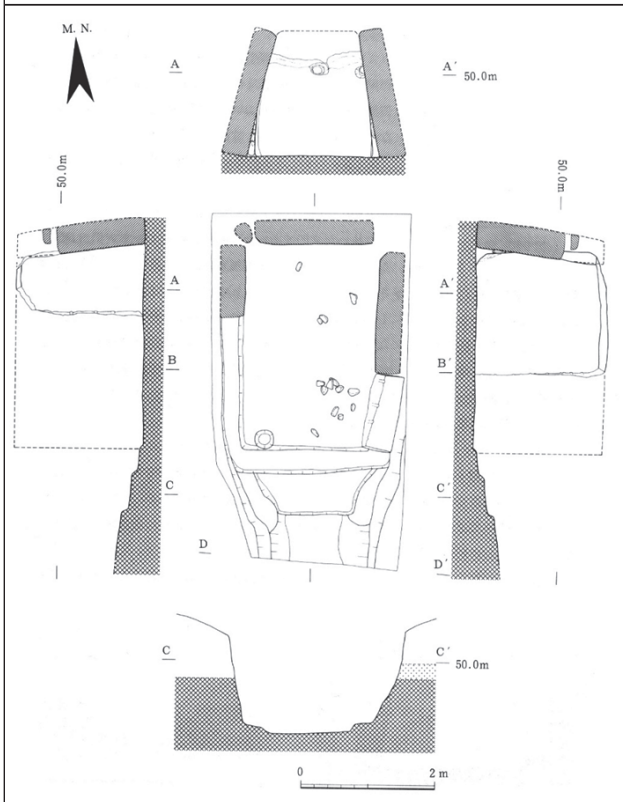
- 秋元陽光・大橋泰夫 1988 「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向」『栃木県考古学会誌』第9集 栃木県考古学会  
君島利行 2011 「しもつけ古墳群とは」『しもつけ古墳群』壬生町歴史民俗資料館  
小森哲也 2015 『東国における古墳の動向からみた律令国家成立過程の研究』六一書房  
小森哲也 2016 「横穴式石室と地域首長連合」『とちぎを掘るー栃木の考古学の到達点ー』随想舎  
広瀬和雄 2008 「下野地域の後・終末期古墳の歴史的意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第163集 国立歴史民俗博物館

甲塚古墳は二段築成だ  
石室は前方部にある

基壇(きだん)



甲塚古墳の石棺式石室



年代・編年	石室図
I 550	1 吾妻古墳 2 国分寺甲塚古墳 3 上三川兜塚古墳 4 御鷲山古墳 5 下石橋愛宕塚古墳
	6 壬生車塚古墳 7 上三川愛宕塚古墳 8 国分寺丸塚古墳 9 大塚岩家古墳 10 多功大塚山古墳
	II
	III 600
	IV 650
V	横口式石室

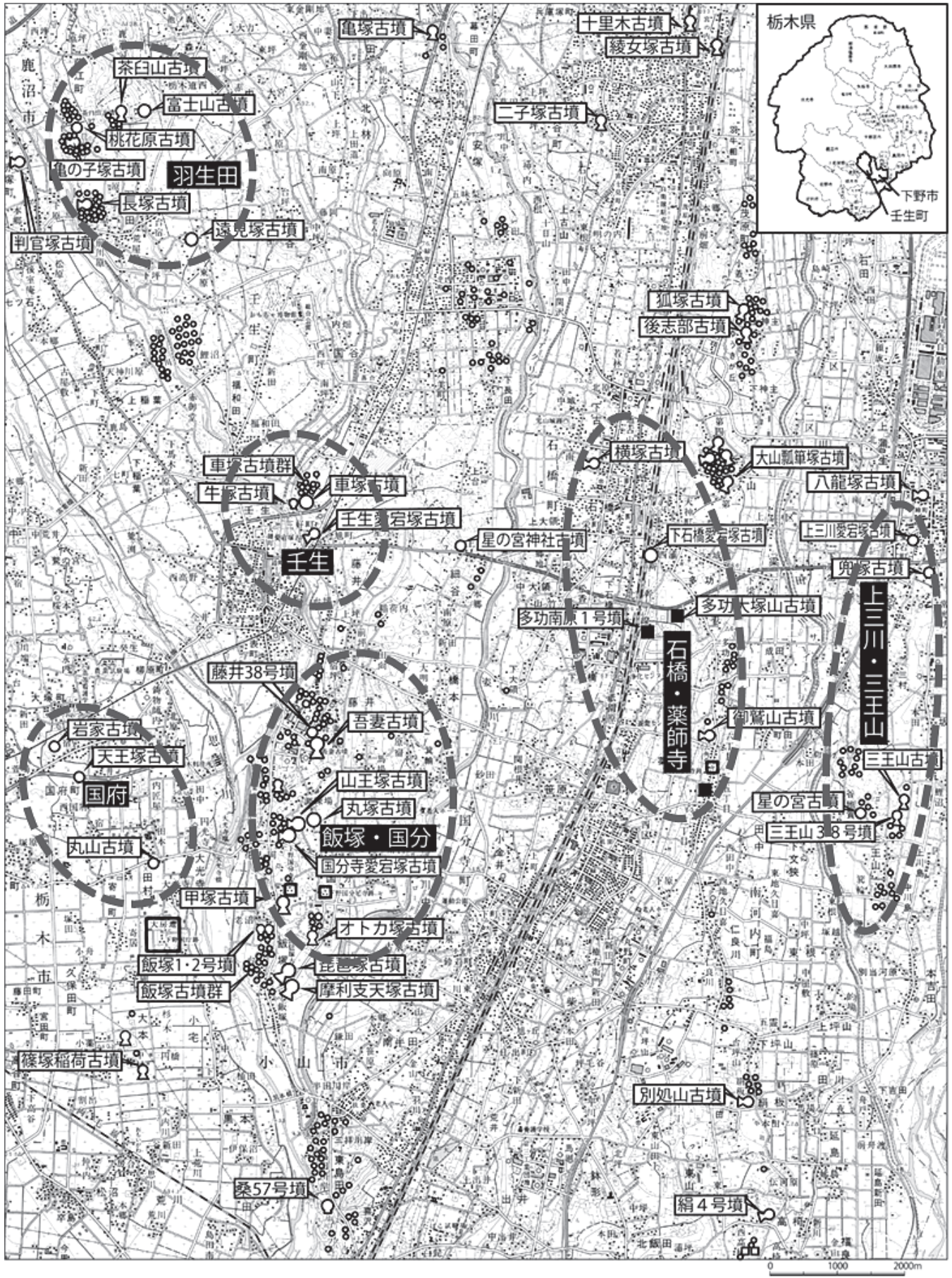
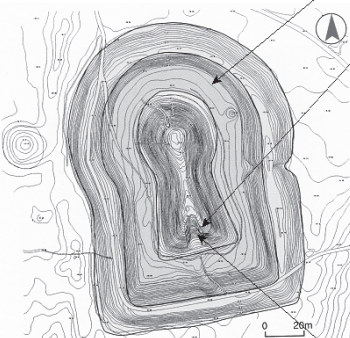


図1 栃木県南部における主要古墳の分布


# 下野型古墳とは？

特徴1 低平な墳丘第一段（基壇）



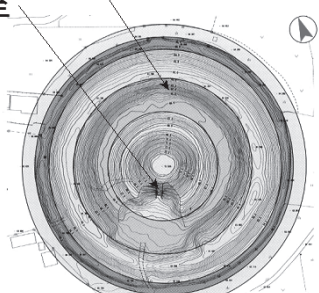
吾妻古墳 (128m)

特徴2 大型切石を用いた石室



上三川兜塚古墳の石棺式石室

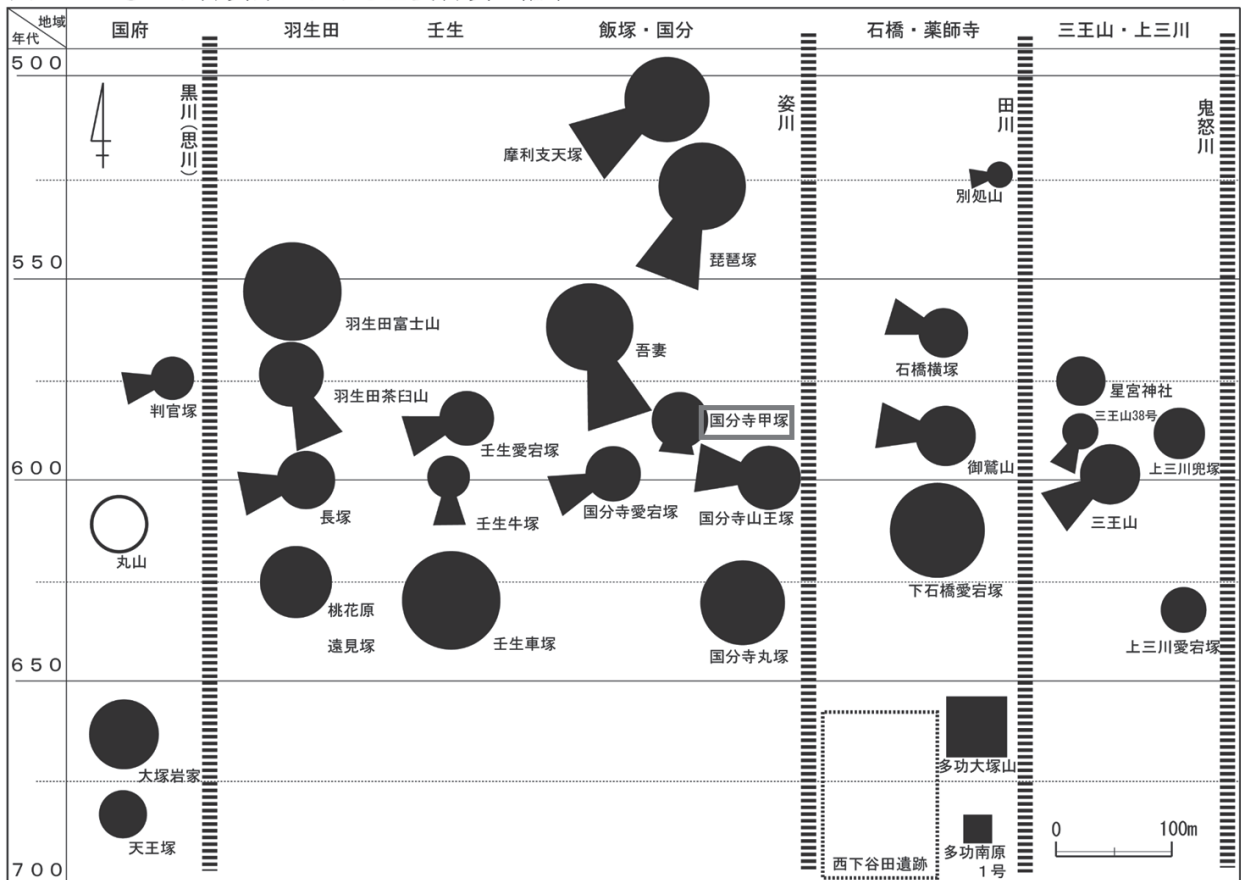
特徴3 前方部のみに埋葬主体



壬生車塚古墳 (86m)

## 下野型古墳 3つの特徴

図2 しもつけ古墳群における主要古墳の編年



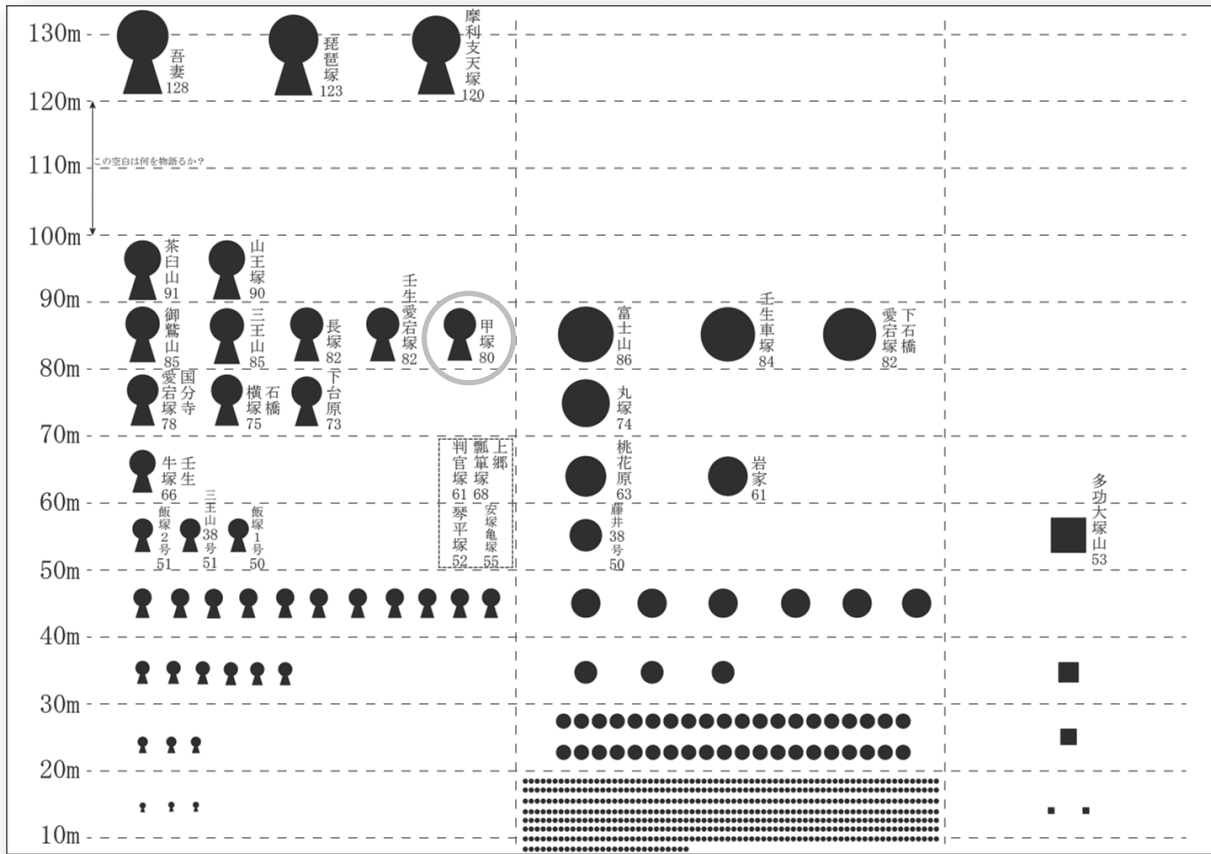


図3 しもつけ古墳群における古墳の規模と築造数

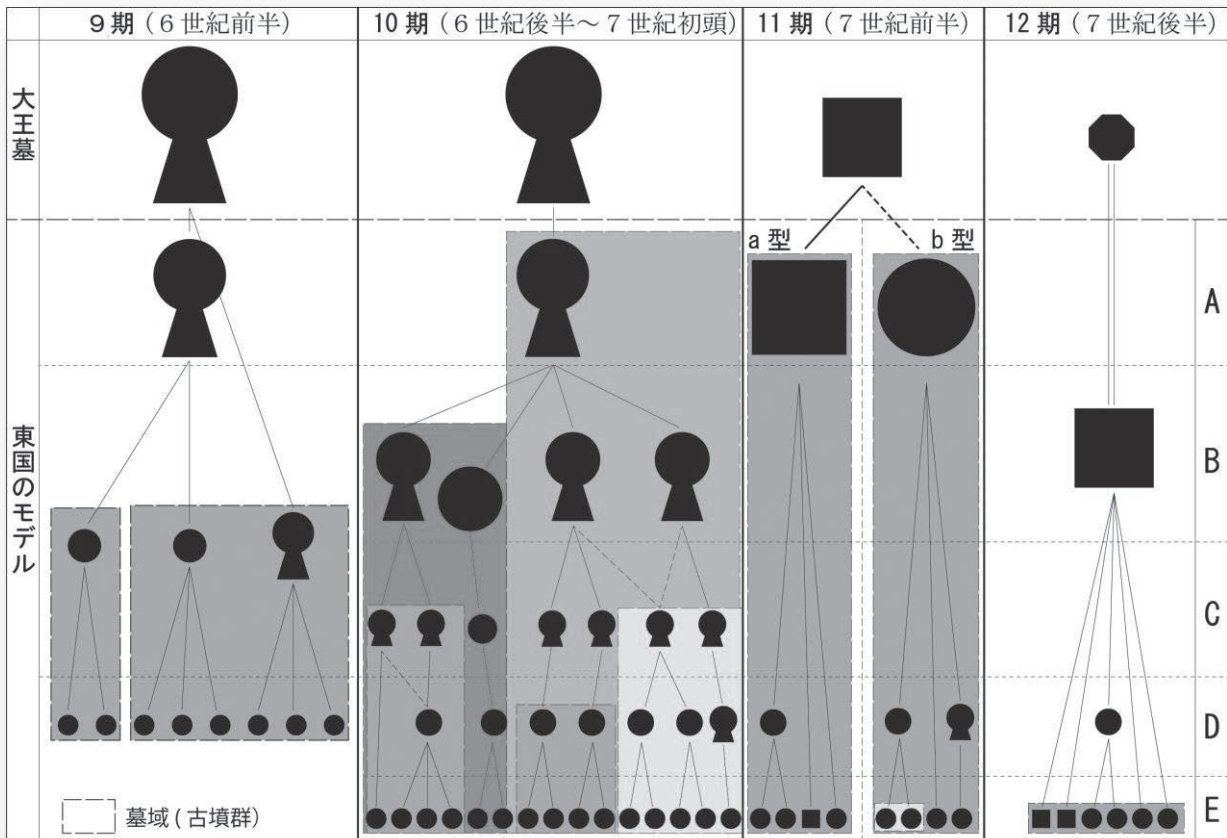


図4 古墳からみた6～7世紀の社会構成モデル

# 甲塚古墳の馬形埴輪について

井上 裕一（早稲田大学）

## はじめに

日本列島に乗馬の風習が伝わったのは4世紀後半に遡る。4世紀末から5世紀初めに朝鮮半島の高句麗との戦闘を経験し、騎馬軍団の編成が本格的に進められ乗馬の風習が広まっていった。馬を飼育する牧が整備され、馬具の生産工房も畿内につくられた。豪華な馬具を装着した馬が、畿内の王権から各地の有力者へ下賜された。それとともに東北アジアの服飾と飾馬の身分表象による装飾騎馬文化も浸透していく。倭王権でのその成立は、5世紀中葉のf字形鏡板轡と剣菱形杏葉のセット生産開始に求められる。

馬形埴輪の飾馬は、轡（くつわ）、手綱（たづな）、鞍（くら）、鐙（あぶみ）、面繫（おもがい）・胸繫（むながい）・尻繫（しりがい）の三繫など乗馬に必要な装備に加え、馬鐸（ばたく）や鈴や杏葉（ぎょうよう）などの飾馬具、革帯の交点には豪華な辻金具（つじかなぐ）や雲珠（うず）などを表現している。また、裸馬は、鞍をつけていない馬で、面繫と片手綱だけの表現で、遠征のときの替馬である。馬形埴輪の傍らには、片手をあげた馬曳（うまひき）の人物埴輪が伴い、腰帯に飼葉を刈り取る鎌をさしている。多くの馬形埴輪と馬曳を樹立した古墳の被葬者は、馬の飼育、馬匹（ばひつ）生産にも関わり王権に貢献したと考えられている。

甲塚古墳の人物埴輪や馬形埴輪をはじめとする形象埴輪群は、前方部の西側くびれ部の基壇面ほぼ中央に列状に樹立され、埴輪の脚部や器台部が原位置に残り、埴輪の樹立状況が解明できる数少ない古墳である。馬形埴輪は4体あり、飾馬2体、裸馬2体で、人物埴輪群の最後の石室から遠い位置に馬曳を伴い石室側を向いて樹立されていた。

## 1 馬形埴輪の配列

形象埴輪群の人物埴輪群は、その正面を墳丘の外に向かせ、馬形埴輪は馬体の右側を見せて樹立されていた。馬曳は馬の左側やや前方に他の人物埴輪と同じように墳丘の外を向いて配置されている。北西側の後円部の周溝にはブリッジが存在し、前方後円墳の墳丘側に樹立された埴輪群と周溝との間に生じたテラスが、石室にいたる墳丘内墓道と考えられる。墳丘内墓道の前方部・石室に最も近いところ、人物埴輪群が終り同列から連なる円筒埴輪と朝顔形埴輪の列の前で、大甕を据え、多量の須恵器と土師器を使用した墓前祭祀が行われ、使用された土器群が墓道を塞ぐように廃棄され、結界がつけられている。

形象埴輪群は、石室側から、埴輪祭祀の儀礼表現に始まり、三角高帽子の鍬を担いだ農夫、奉仕する若者と女子人物埴輪が続いている。人物埴輪の中央には機台をもつ地機で奉仕する女子など2種類の機織形埴輪が表現され、その脇には盛装の女子埴輪、さらに奉仕する女子が続き、最後に頭に容器を掲げ柄杓（ひしゃく）を持った女子が配置される。人物埴輪群を守るかのように、盾持ち人形埴輪がおかれている。馬形埴輪と馬曳は、ブリッジの出口に最も近い部分に樹立されている。馬形埴輪はいずれも石室開口部側に頭を向け、女子の横坐り乗馬の飾馬1（馬形埴輪1）が先頭で、次に胸繫に馬鈴をつけた飾馬2（馬形埴輪2）が続き、替馬の裸馬3（馬形埴輪3）、裸馬4（馬形埴輪4）と続いている【第1図】。馬形埴輪と馬形埴輪の間に必ず円筒埴輪を介在させ区切っている。また、馬形埴輪は馬体の右側の馬具馬装を墳丘外に見せるかのように配置され、その左側前方に馬曳が伴い、面繫に手をのばしている。

馬形埴輪は、形象埴輪群の中で、人物埴輪の後に最後尾に配列され、横穴式石室の入口から離れた位



置に石室側を向き、樹立されている。馬形埴輪は人物埴輪群、もしくは古墳に到着した様相を呈している。大阪府高槻市今城塚古墳では馬形埴輪が、4区の宮門外に並んで配置されていた。宮内の儀礼表現に臨む参列者の乗り物と考えられている。甲塚の馬形埴輪と馬曳の表現は今城塚古墳4区に該当する埴輪表現である。円筒を馬形埴輪の間に配置するのは、他の人物埴輪群と同じ列状の表現でも区が異なることを表し、墳丘内墓道との結界、馬形埴輪群が墳丘側にあり、その接点に位置していることを表したものである。

## 2 馬形埴輪の製作技法

馬形埴輪の製作技法は、まず、粘土紐を巻き上げ、長い脚部を作り、脚部の基底部は円筒のままで蹄カット等は行わない。胴部は粘土紐と粘土板で連続して成形し大きく胴部下・側部・背部と三段階で形作り、基本的に胴部は粘土紐を積み上げて成形している。内面の成形に伴う調整は工程ごと施し、胴部内部の最終段階の調整は頸部と尻部の空間より胴側部と背部との接合箇所を中心に行う。頸部は、粘土紐で成形し、その上に頭部を接合している。頭部は円筒側板開口式頭部で、円筒形の頭部基部を頸部に被せるようにのせ、側面に粘土板を貼付けている。頭部と頸部の接合を補強するとともに顔の側面高を確保している。角状タテガミと有段の板状のタテガミが表現される。甲塚古墳出土の馬形埴輪の製作技法は、上毛野中央部から東部にみられる円筒側板開口式頭部の大形馬形埴輪と同じ成形技法を用いており、製作技法や工人の系譜はそこに求められる。

甲塚の馬形埴輪の系譜となる円筒側板開口式頭部は、円筒の頭部の側面に粘土板を貼付ける技法は、畿内の多工程で造られる頭部において、側面から見た顎部を写實的に表現する為、頭部下部に粘土板を付加して切り込みを入れる手法から派生した技法である。この表現手法は、5世紀第IV四半世紀に畿内大王墓（仁徳天皇陵など）生産に従事した埴輪工人から武蔵に伝わったもので、東国での初源は埼玉県行田市稲荷山古墳から馬形埴輪の頭部側板部分が出土している。円筒端部を開口したまま、口の切り込みを側面に入れる円筒側板開口式頭部の馬形埴輪は、群馬県太田市塚廻り4号墳、箕郷町上芝古墳など6世紀第II四半世紀から作られはじめ、太田市成塚石橋遺跡2号墳や高崎市中原II遺跡1号墳など6世紀第III四半世紀（須恵器TK10併行期）に盛期をむかえて大形化し、小泉大塚越遺跡3号古墳、伊勢崎市雷電神社跡古墳や高崎市神保下条2号墳など6世紀第IV四半世紀、7世紀初頭まで続いている。分布は武蔵・上毛野・下毛野・下総・上総と上毛野東部を中心に広域に及んでいる。6世紀第III四半世紀に大形の馬形埴輪を東国に広めた製作技法と位置づけることができる。畿内の今城塚古墳の馬形埴輪の頭部にも側面板表現が認められ、畿内の埴輪工人との関係も考慮される。畿内の馬形埴輪は、頸部の表現が短く胴部の上に頭部を載せたようなものが多く、頸部の長さがその影響の度合いをはかる基準ともなる。甲塚の場合は、頸部は短く、畿内の馬形埴輪の影響を受けている。下毛野で円筒側板開口式頭部の馬形埴輪の全体像が明確にとらえられるのは、甲塚古墳からで時期は6世紀第III四半世紀（須恵器MT85形式の併行期）に比定される。甲塚古墳の馬形埴輪は、同じ円筒側板開口式頭部の馬形埴輪が出土した栃木県小山市横塚山三味線塚古墳と宇都宮市瓦塚古墳の間に位置づけられる。

## 3 馬形埴輪の馬具・馬装表現

先頭の飾馬1は、面繫の口脇には環状の鏡板に被せてf字形鏡板をつけている。辻金具は大きく半球形で表現し、胸繫に馬鐸3個、尻繫に馬鐸2個を左右に垂下する。馬鐸は、粘土板を馬体に貼付けて表現し、粘土の円盤を3列に添付して装飾する。同馬鐸の表現手法は、群馬県箕郷町上芝古墳出土の馬形埴輪の馬鐸のように当初は縁金の粘土紐の上に鋌を表す円盤を付けたものが、縁金の粘土紐が略され鋌

の円盤だけ装飾的につけたもので、埼玉県熊谷市中条古墳群上中条支群鹿那祇東古墳出土の飾馬の馬鐸表現と同じである。同馬形埴輪は頭部製作技法も円筒側板開口式頭部と考えられ、甲塚より前出的で6世紀中葉に比定される。半球形の辻金具表現は、金銅装の半球形の辻金具を表現したもので、実際の馬具は、金銅装の方形や爪形の留金具と鋌で革帯にとめられている。同表現は、群馬県前橋市内堀 M-4号墳の馬形埴輪にも認められ、同飾馬の辻金具表現は革帯に装着する鋌や留金具を表現し、甲塚の方がより形骸化が進んでいる。

鞍部は前輪と後輪を粘土板で表しただけの簡略化させた表現である。障泥（あおり）吊金具を粘土紐で表現し、障泥の下部縁辺は薄い粘土板をはりつけている。壺鐙は粘土で形作り、鞍部から粘土紐で左右に垂下させている。鞍には横坐り乗馬の表現があり、馬体の右側、周溝側に表現され、古墳の外から見える位置に配置されている。鞍の直下、障泥の上部に粘土板を水平に貼付けて短冊形水平板を表現する。同板の下には壺鐙が表わされ、馬鐸で飾った壺鐙の鞍を装着した飾馬に、短冊形水平板をつける事により、足を置いて横坐りするための馬具と考えられる。『日本書紀』天武紀の記載などから女子が横坐りで乗る乗馬法と考えられている。馬形埴輪の短冊形水平板の表現は、女子が乗る飾馬の表象となっている。

短冊形水平板による横坐り乗馬の表現の馬形埴輪は、奈良県橿原市四条1号墳が最も古く、5世紀後半に比定される。革装の鞍に輪鐙を垂下し、障泥をつけ障泥吊り金具は、線刻で表現されている。短冊形水平板は2本の吊紐を鞍上部より鞍褥の上を垂下させ、足置き板が水平になるように吊り下げている。縦坐りしていた飾馬に女子が乗る為に横坐り用の馬具、短冊形水平板を垂下したものと思われる。6世紀前半に比定される京都府音乗谷古墳の横坐り乗馬の短冊形水平板は、鞍の鞍褥の下から2本の吊紐が垂れそれに下げる形式で、足置き板が表障泥の上に表現されている。鞍から鐙の垂下はなく、横坐り乗馬専用の飾馬となっている。鞍の鞍褥（くらしき）の下から2本の吊紐で垂下する表現は、群馬県東村雷電神社跡古墳の胸繫に3個の馬鐸を垂下した飾馬に認められる。褥の下から2本の吊紐で足置きの板を水平に下げ、障泥の吊金具の位置に表現する。肥厚した水平板の下に壺鐙を装着しており、縦坐り横坐り兼用の飾馬の表現となる。

甲塚古墳の短冊板水平板は、鞍褥の上に吊紐の表現はなく、鞍の直下の障泥上部の吊金具の位置に表現されていることから、鞍褥の下から吊紐で下げる短冊形水平板を表したもので、吊紐の革帯表現を省略したものと思われる。

飾馬2は、面繫は半球形の辻金具に、鏡板は鈴付きの環状鏡板である。胸繫には幅広の革帯に馬鈴を5個、鈴の基部には飾金具を表現している。尻繫は、背中央に大きな半球形の雲珠をつけ左右に革帯を下げるが杏葉の表現はない。鞍は前輪と後輪を粘土板で形作り、鞍褥の粘土は付加せず馬体のままで、黒く彩色されている。障泥は、障泥吊金具を粘土紐で写實的に表現し、障泥本体部は馬体のままである。鐙には肥厚したドーナツ状の輪鐙を鞍から左右に垂下する。鞍、障泥を黒く塗彩している。横坐り表現の馬具が装着されておらず、男子が乗る飾馬である。飾馬1に比べて豪華さはなく、下賜された馬具の質や階層性も劣っている。馬形埴輪としては、6世紀後半にみられる飾馬の馬装表現である。

裸馬3と裸馬4は、面繫の辻金具には大きな円盤に宝珠飾りの突起を表現する。裸馬3の革帯は2本の革帯を平行に巡らせ、1本ずつ斜めに線刻、両方で文様を表し、矢羽根文となる。裸馬4の面繫の革帯は、幅広で線刻により三角文で飾っている。円盤の飾金具の表現は、円形飾金具を辻金具に配した馬で、片手綱であることから曳き馬であることを表している。2体とも口先の轡部分を欠くが、おそらく無口頭絡と思われる。これらの裸馬は飾馬の替馬であると考えられ、大王に奉仕するため畿内に行く際には替馬を伴っていたと思われる。生前の被葬者の在り方を反映させているのであろう。

馬形埴輪が人物埴輪群の参列者の乗り物であるならば、飾馬1は下毛野王権、大王権に地機織により貢献した女子をのせる為の白馬と思われる。それに対し飾馬2は、胸に馬鈴を垂下し、尻繫には杏葉はなく、円墳の被葬者に樹立されるランクの馬具・馬装の表現である。人物埴輪群による儀礼表現の核心部分の姿態が、半身像で帽子や衣装などから、同埴輪祭祀を司る在地首長の男子の乗り物と判断される。

#### 4 馬形埴輪の白馬表現

甲塚古墳の馬形埴輪の最大の特徴は4頭の馬形埴輪が白く彩色され、白馬を表現していることである。白色の粘土鉱物、白土を塗っていると考えられ、頭部から頸部、胴部、脚部へと所々に遺っている。タテガミや脚部は、馬体の白色とは異なり、灰白色に表現しているものがある。これは、はじめ黒く塗り次に白土を塗ることにより灰色を作り出したもので、実際の白馬を写実的に表そうとしたのであろう。白土は風雨や、乾燥にさらされると剥落しやすく、本来は全面的に塗られたものが剥落し、ところどころに残存しているものと思われる。鞍部、障泥を黒色に塗り、前輪と後輪の縁金と障泥の縁部を赤彩していた。面繫、胸繫、尻繫の革帯は赤色塗彩して飾られている【第2図】。

白色彩色を施した馬形埴輪の類例には、東京都葛飾区柴又八幡神社古墳の飾馬があげられる。明橙色を呈する飾馬の顔部や前脚の付け根に白色塗彩を施した痕跡が認められた。分析の結果、同じように白色粘土、白土を塗ったものである。同飾馬は下総型埴輪の馬形埴輪で、頭部は口先端部を円筒形に形作り、胸繫と尻繫に馬鈴を垂下している。鞍は前輪と後輪のみを粘土板で作り、障泥を薄い粘土板で表現する。時期は須恵器 TK209 併行の6世紀末から7世紀初頭に比定される。また、千葉県横芝町姫塚古墳からも灰白色に塗られた馬形埴輪頭部が出土しており、環状の轡に鏡板と辻金具には粘土円盤に宝珠の突起をつけ、貝製飾り金具を表現している。同古墳からは赤色塗彩された裸馬も出土している。時期は6世紀第IV四半世紀に比定される。このように異なる系譜の埴輪工人在、東国で広範囲に白土を塗り、白馬を表現している。

馬形埴輪の彩色について概観すると、古墳時代中期、野焼き生産から窖窯（あながま）生産に移行した初期の段階では、馬形埴輪は白く焼かれていた。やがて白く焼かれた馬形埴輪に赤彩を施し馬具馬装を飾り、もしくは、馬体を赤く塗り赤馬としている。奈良県橿原市四条1号墳の馬形埴輪、飾馬は、脚部や胴部、タテガミ等の馬体に赤彩が残り、赤馬表現になるのに対し、輪鐙を垂下した鞍に短冊形水平板を装着した横乗り乗馬の馬形埴輪は、灰白色に焼かれたままとなる。このように白色、灰白色に焼かれたままの馬形埴輪を白馬と見なしてもよいのではなかろうか。

赤には再生と邪気を払う意味があり、埴輪祭祀の中で鶏や犬やイノシシなどの他の動物形埴輪も赤彩されていく、馬形埴輪の赤色塗彩もその一環と考えられる。次の段階では、赤彩するのではなく、焼成時に酸化させて赤味を創出するようになる。黄橙色や明橙色に焼き、赤味が足りなくなれば赤彩を施している。さらに6世紀第IV四半世紀、東国の埼玉県鴻巣市生出塚埴輪窯では、ローム土を混ぜ焼成のみで赤く焼き締めて赤馬の馬形埴輪を製作している。

馬形埴輪の白馬表現には天空を駆ける天馬の意味が込められている。馬形埴輪は白く焼き白馬を樹立することに始まったが、埴輪祭祀の中で邪気を払い再生の意味を持つ赤色塗彩の影響を受け、馬形埴輪自体も埴輪の馬として、赤く塗られるようになり、赤馬が広く普及していった。詳細に見ていくと赤馬と白馬の両者は併存し、全時期を通じて存在しており、また、一つの古墳の中においても白馬と赤馬が存在するものがあり、馬形埴輪を紅白で樹立していることが考えられる。

白馬による天馬表現で最も著名なのは韓国慶州、新羅の天馬塚あげられる。同古墳の時期は、6世紀第I四半世紀に比定される。白馬表現は、障泥に見られ、白馬がタテガミと尾をなびかせながら天空を

駆けている様子を表現している【第3図】。6世紀前半の高句麗壁画の四神図の描き方に類似している。障泥は、白樺の樹皮を重ね合わせて縫い目が斜格子になるように縫製しており、表面外周に朱、黒、白、緑色で彩色した忍冬唐草文を巡らし、内側に白馬や花文を描いている。この時期は、新羅がそれまでは心葉形杏葉に代表される高句麗由来の装飾馬装を使用し、その影響を受けていたが、三葉文、忍冬楕円文といった独自の意匠を採用することにより、新羅独自の装飾馬装が完成した段階である。この新羅の装飾馬装は、倭王権において、継体天皇（今城塚古墳）以降の馬具の装飾馬装や馬形埴輪の馬装表現に影響を及ぼしている。甲塚に見られる胸繫と尻繫に馬鐸を垂下する装飾馬装も新羅の装飾馬装の影響を受けたものと考えられ、馬形埴輪の白馬、天馬への回帰も、新羅からの影響が契機となっているのであろうか。

甲塚古墳の馬形埴輪が4体とも白馬で表現されている意義は、赤い埴輪の馬から白馬への転換したことにある。ある意味では、白馬の性格が勝り、白く焼く白馬の表現への原点に回帰したものと考えられる。天の御霊の依代として古墳に導くため、御霊を制御する乗り物として、馬曳に導かれた白馬の飾馬を表現したのであろう。馬形埴輪の飾馬の曳き馬表現は、見えない御霊を導くには極めて有効な装置である。この被葬者の御霊を導く白馬の表現には、後世、神を導く神馬に通じる要素が存在している。甲塚古墳の白馬の馬形埴輪表現は、埴輪の赤馬から神馬の白馬への転換の契機になったと言っても過言ではない。

甲塚の飾馬1は、赤く飾られた革帯に胸繫に3個、尻繫に2個合計5個の馬鐸を垂下し、面繫にはf字形鏡板付き轡で金銅製の半球形辻金具で飾り、壺鐙を垂下した黒色の鞍を装着した白馬で、横坐用の馬具、短冊板水平板をかけた女子の乗り物であることを表している。

## 5 まとめ

甲塚古墳の馬形埴輪は、製作技法は、上毛野中央部から東部にみられる円筒側板開口式頭部の大形馬形埴輪と同じ成形技法を用いており、製作技法や工人の系譜はそこに求められる。細かく見れば、彩色の手法は、群馬県太田市塚廻り古墳群に類似しその系譜に属する。また、製作技法は、群馬県伊勢崎市雷電神社跡古墳など上毛野東部との類似性が高く、上毛野東部の影響を受けている。時期は6世紀第Ⅲ四半世紀（須恵器MT85形式併行期）に比定される。

甲塚の馬形埴輪の最大の特徴は、4体の馬形埴輪が白馬の表現であることである。これまで、馬形埴輪は埴輪の馬として、赤く焼かれ、赤色に塗られて赤馬となっていた。『日本書紀』雄略九年秋七月に埴輪の馬の記載がある。田辺史伯孫が、女の男子出産のお祝いの帰り、月夜の誉田陵（応神天皇陵）で、赤馬の駿馬に乗っている人に出会い、自らが乗っていた葦毛の馬と交換した。大いに喜んで、厩に入れ、翌朝になると赤馬は埴輪の馬にかわっており、誉田陵には自らの葦毛の馬が埴輪の馬の間に立っていたとの話である。男子出産という生命誕生に関係した出来事で、応神陵に赤馬の埴輪が樹立されていた可能性と古代においては埴輪の馬を赤馬と考え、駿馬であると認識していたことをこの説話から知ることができる。

馬形埴輪は、人物埴輪出現以前から樹立されており、被葬者の権威や財物の象徴として飾るだけではなく、椅子形埴輪と同じようにそこに坐る主人公、騎乗者は目には見えない存在で、御霊と考えられ、古墳へ、形代である埴輪群に御霊を誘導する装置としても機能していたと思われる。馬形埴輪は人物埴輪の儀礼表現の参列者が乗る馬形埴輪の赤馬表現から、白馬には天馬としての性格があり、天の御霊を乗せて運ぶという白馬表現に移行していた。この白馬の表現は、古墳時代中期以降、様々な時期に存在

している可能性があり、馬形埴輪に当初より内包されていた性格と考えられ、馬形埴輪の赤馬から白馬への転換は、人物埴輪群出現以前の馬形埴輪の原点に回帰する重要な意義を持っている。

東国の円墳や帆立貝式古墳の表現では、前方後円墳の大王墓や王墓に樹立される形象埴輪群の構成の中で、被葬者と関係の深いものを抽出して表現する事がある。これについて、杉山晋作氏は、地域を支配する関東の豪族は、地方首長と畿内を中心とした政権の構成員としての姿を兼ね備えており、子弟や子女も地方の支配層を構成する一員であると同時に、舎人（とねり）や采女（うねめ）として上番し畿内で奉仕し、中央機構の構成員でもある二面性を持っていることを指摘している。そして、人物埴輪が、被葬者の生前業績の情景を表現している可能性を示唆した。甲塚の白馬の飾馬に乗ることが許された女子は、それらの馬具、馬装や馬が大王権から下賜されたものであるならば、下野の王権のみならず、大和を中心とする大王権の中でも、かなりの身分や職を有し、王権や大王権に奉仕、貢献していたものと思われる。おそらく下毛野王権、大王権に地機織により貢献した女子であろう。また、馬鈴の馬具馬装表現の飾馬2に乗る人物は、甲塚では農民の人物埴輪の表現が見られることから、甲塚の被葬者は、渡来系の農耕技術を駆使し台頭する農民を支配組織に組み込んだ在地首長であることを表しているのではなかろうか。広瀬和雄氏は、後期古墳の副葬品と農民の武装から、大和政権が支配の対象を首長よりも社会の下位のレベルまで及ぼしたことを指摘している。

横塚古墳出土の馬形埴輪の尾は、甲塚古墳の裸馬4の特徴的な尾と酷似し、横塚古墳の埴輪は系譜を同じくする可能性がある。また、飾馬2の尻繫の中央に表現された大きな半球形を呈する雲珠や飾馬1・2の面繫に表現された半球形を呈する辻金具は、半球形の鉄地金銅張りの雲珠や辻金具の馬具を表現している。同種の馬具が下石橋愛宕塚古墳に副葬されている。甲塚古墳が、下野古墳群の中でも横塚古墳⇒御鷲山古墳⇒下石橋愛宕塚古墳と下毛野首長の系譜でも後の下毛野氏と何らかの関係が考慮される。

#### 〔参考文献〕

金元龍・金基雄ほか 1974年『天馬塚 発掘調査報告書』文化広報部文化財管理局

諫早直人 2012年『東北アジアにおける騎馬文化の考古学的研究』雄山閣

木村友則・橋本高志・山口耕一ほか 2014年『甲塚古墳—下野国分寺跡史跡整備関連発掘調査報告書』下野市教育委員会

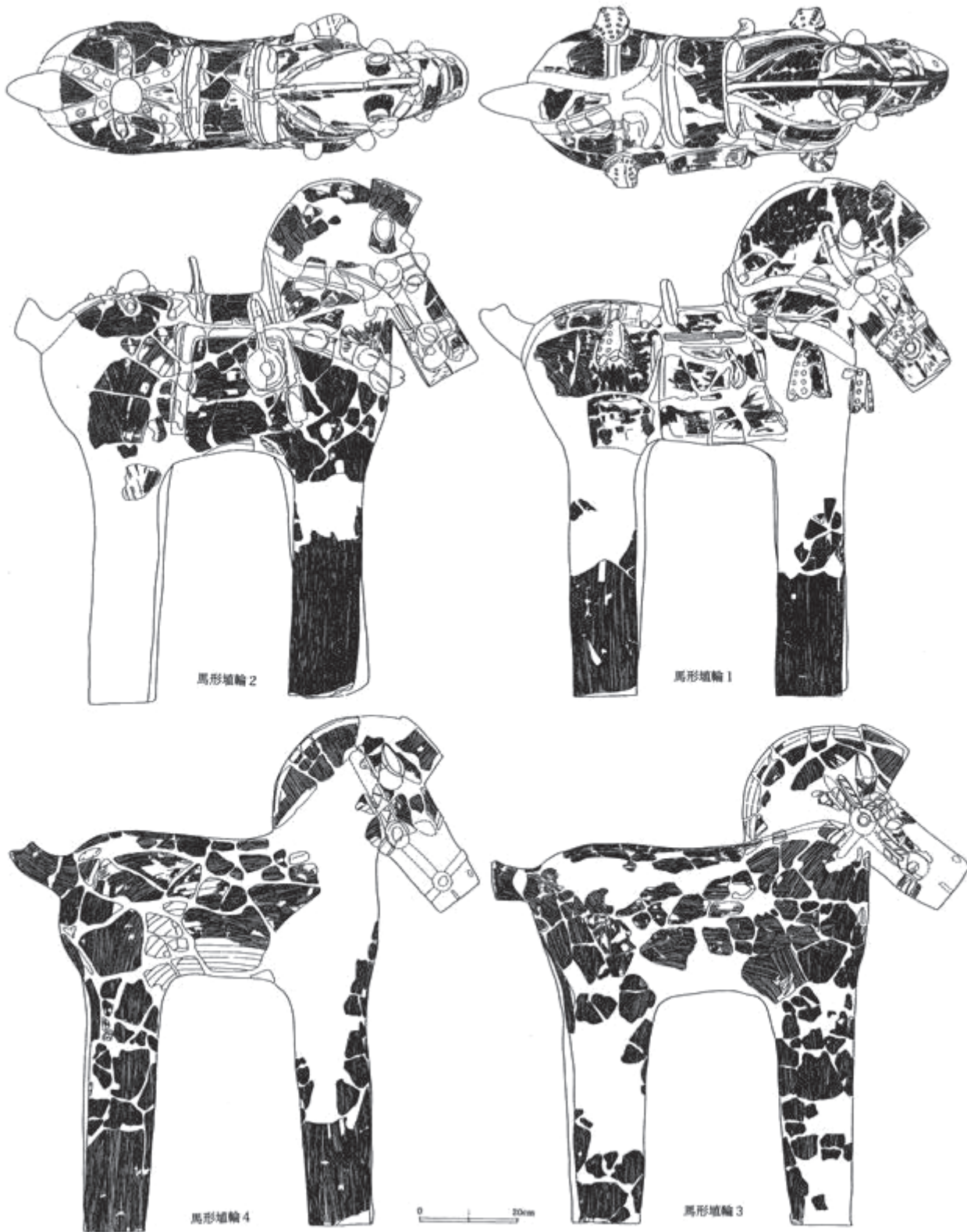
杉山晋作・井上裕一・日高慎 1997年「古墳時代の横坐り乗馬」『古代』第103号

杉山晋作 2006年『東国の埴輪と古墳時代後期の社会』六一書房

日高 慎 2013年『東国古墳時代埴輪生産組織の研究 —埴輪生産の交流と地域性をめくって—』雄山閣

広瀬和雄 2007年『古墳時代政治構造の研究』塙書房

松村一昭 2009年「雷電神社跡古墳の埴輪」『国宝武人ハニワ、群馬へ帰る！』群馬県立博物館



第1図 甲塚古墳出土の馬形埴輪



第2図 甲塚古墳馬形埴輪1彩色復元図



第3図 韓国慶州・新羅天馬塚古墳出土障泥の天馬

# 甲塚古墳の埴輪群像における被葬者像について

日高 慎（東京学芸大学教授）

## はじめに

下野市甲塚古墳は、径 80m の円形基壇の上に主軸長 47m の前方後円形墳丘がのるといふ、極めて特異な形状をなす 6 世紀末ころの首長墓である。横穴式石室西側の円筒埴輪列に挟まれた範囲から数多くの男女と馬の形象埴輪が列状に検出された。石室に近い位置から、男性 7 体、そして女性 9 体（第 1 図）、さらに馬 4 体と馬曳き男性 4 体のセット（第 2 図）が立てられていた。

## 1 男性・女性の副葬品と埴輪の性差

玉城一枝氏によれば、基本的に手玉・足玉は女性に限られる。しかし、古墳の被葬者で男性とされているものの中にも手玉をしている例があり、副葬という面では男性も手玉をするようだ。釧は男女ともに副葬される。清家章氏によれば、従来から鍬形石は男性というのは良さそうであり、車輪石や石釧は明確な性差が認められないようだが、腕部に置いている例（着裝？）は女性に限定されるようである。

埴輪にみる手玉・釧については、手玉は女子のみ（第 3 図）、釧は男子像にも若干例がある。塚廻り 4 号墳の場合は、跪く男子が籠手をはめた上に鈴釧をつけている。ほとんどの場合、籠手（手甲）はつけるが、手玉・釧をつけないのが男子像の基本造形だったようである（第 4 図）。

## 2 被葬者は埴輪に造形されるのか

甲塚古墳の埴輪群像のなかで、私が中心人物と考えているのが人物 6 の女性像である。女性像のなかでは最も大きく造形され、頭飾りや服装表現が立体的につくられるなど、他の女性像にはない特徴がある。馬 1 が馬の中でもっとも豪華な飾り馬具をつけるが横坐り仕様という女性用の馬であること、男性よりも女性の数が多いこと、2 体の機織り形埴輪が中心像の人物 6 のすぐ横に配置されていることなどから、人物 6 という女性像が被葬者の姿であり、甲塚古墳は女性首長の墓なのではないか。

一方、千葉県市原市山倉 1 号墳では、双脚の男子像（頭巾ないし振り分け髪）が中心人物と思われ、2 体の渡来人も存在する（第 5 図）。群馬県高崎市綿貫観音山古墳では胡坐し両手を合わせる男性が中心人物であろう（第 6 図）。太田市塚廻り 3 号墳では椅子に坐る男性像（第 7 図）、塚廻り 4 号墳でも椅子に坐る男性像（第 8 図）が中心人物であろう。大阪府高槻市今城塚古墳の最も重要な儀式の場面 3 区に存在する坐像のうちのいずれかが、いわゆる継体大王の生前の姿である可能性もあろう（第 9・10 図）。現在までに知られている造形の中で、中心人物と思われるのは圧倒的に男性が多いことは間違いない。

## 3 まとめ

私は、形象埴輪の意義とは、外に対して見せびらかすということが重要であったと考えており、「公の芸術作品」と評したこともある。墳丘の中に入らずとも外からみたときわかるように形象埴輪は並べられた。中堤上に立てられたもの、墳丘の中段に立てられたものは、遠くからそれを望んだとき、古墳時代の人々は被葬者との関わりのなかで何を表しているのかがわかったはずである。私は埴輪が生前に発注されていたと考えており、被葬者の生前の姿を見せびらかすために造形されたと理解している。

【主要参考文献】文献については、日高 2015・2016 などを参照してください

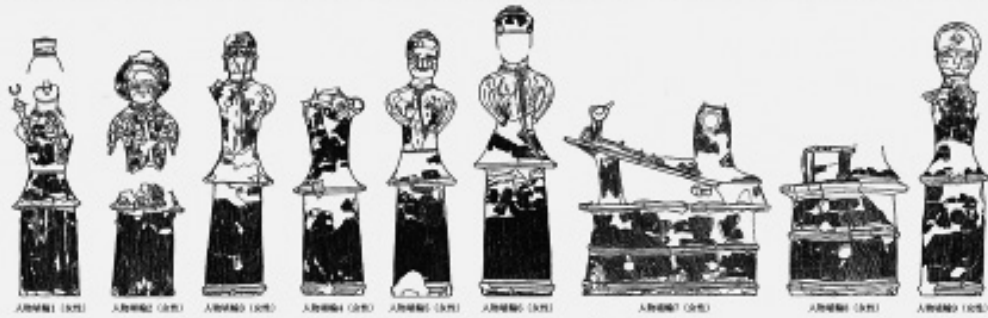
下野市教育委員会 2014『甲塚古墳—下野国分寺跡史跡整備関連発掘調査報告書—』

日高 慎 2015『東国古墳時代の文化と交流』雄山閣

日高 慎 2016「古墳時代の女性像と首長—栃木県下野市甲塚古墳の埴輪をもとにして—」『総合女性史研究』33 pp.30-43



# 甲塚古墳の人物列比較



女子が9体続いた後、男子が7体続く。女子は器物を頭に載せる女子や右手で何かを持つ女子が続き両手を下げる大柄な女子となる。

上げ美豆良の男子

図1 人物埴輪の配列

下げ美豆良の男子

鍬を担ぐ男子

第1図 甲塚古墳の人物埴輪列

# 甲塚古墳の馬列



図2 馬形埴輪馬子の配列

(人物埴輪) 0 50cm  
(馬形埴輪) 0 80cm

人物は右寄り、すなわち石室に近い位置に相対的に上位の男女が配されている。機織形埴輪は女子像の中では最も石室寄りとなる。馬列も左側2体は裸馬であり、右側2体が飾り馬。そのうち最も石室寄りの馬が最も豪華な装具を付けているf字形鏡板、馬鐸で、横坐り用の板が馬胴右側面につけられている。

第2図 甲塚古墳の馬・馬曳き男子

## 女子埴輪と手玉・釧



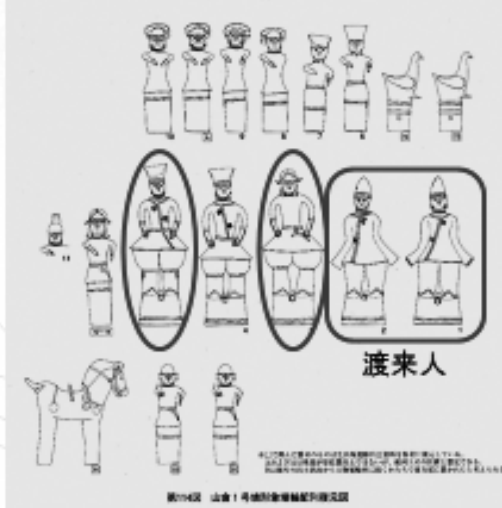
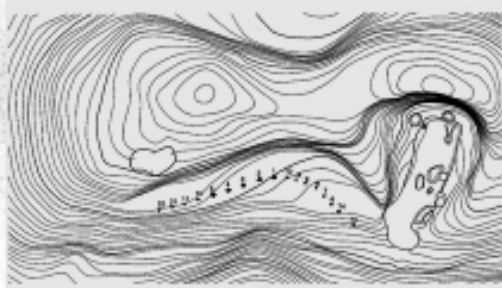
第3図 女子埴輪にみる手玉・釧表現

## 男子埴輪と釧・籠手（手甲）



第4図 男子埴輪にみる釧・籠手（手甲）表現

## 千葉県市原市山倉 1号墳の埴輪配列



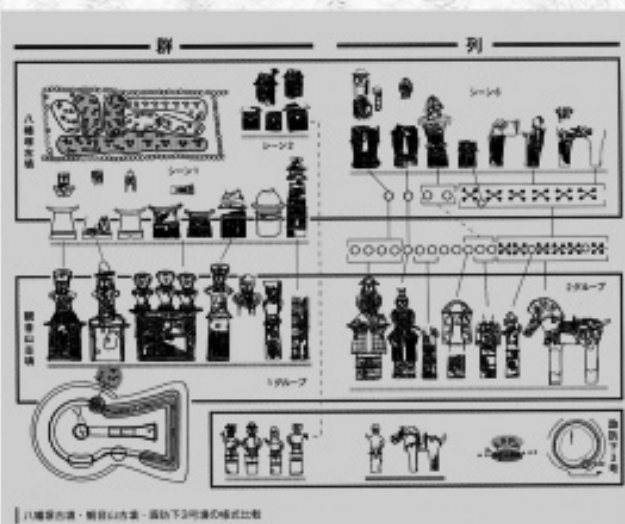
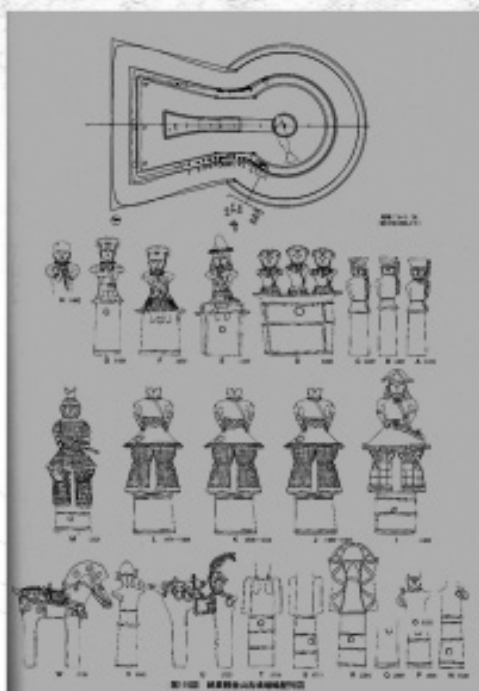
左側から、馬、鎌を担ぐ男子半身像、壺を頭に載せる女子、振り分け髪男子半身像、頭巾状被り物をつける男子双脚像、振り分け髪の男子双脚像、筒袖の男子、女子半身像、頭巾状被りものをつける男子半身像、水鳥、という配列である。

このうち、頭巾状被り物をつける男子双脚像もしくは振り分け髪の男子双脚像が中心人物であると思われる。

筒袖の男子はやや小振りに作られている。儀式に参加する渡来人を表しているのではなかろうか。

第5図 山倉1号墳の埴輪群像と中心人物

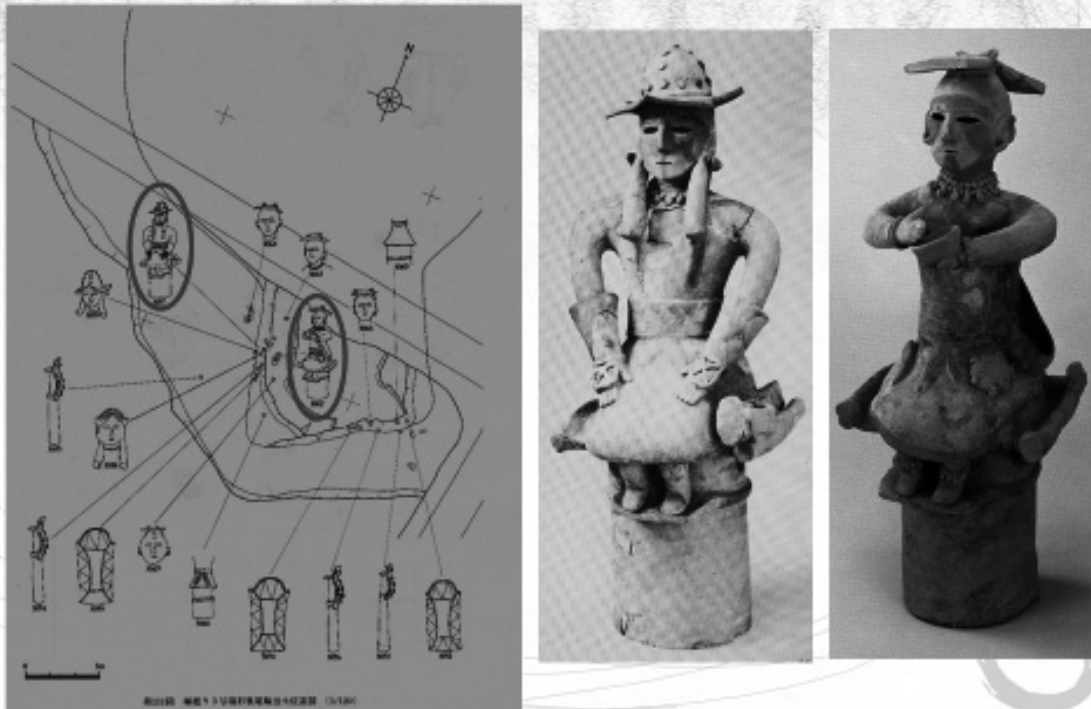
## 群馬県高崎市綿貫観音山古墳の埴輪配列と八幡塚古墳の埴輪配列



両古墳の埴輪配列には配置という意味では異なるものの、要素に分けてみると極めて共通点が多いことが指摘されている。

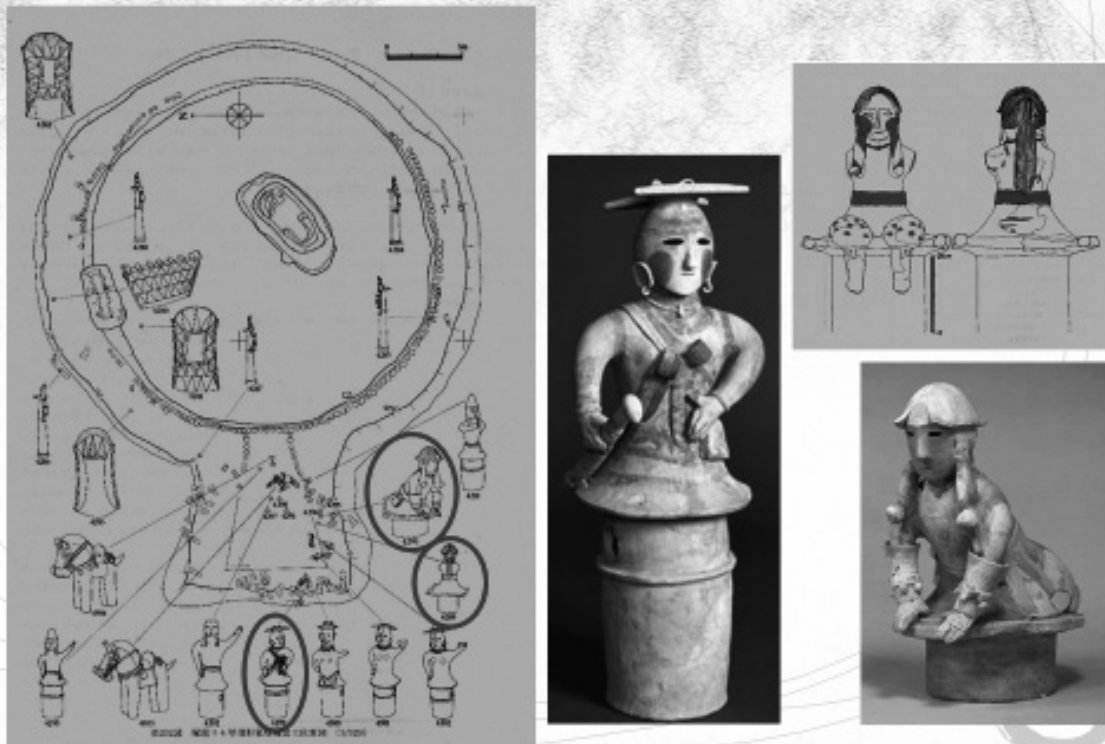
第6図 観音山古墳と八幡塚古墳の埴輪群像と中心人物

## 群馬県太田市塚廻り3号墳の埴輪



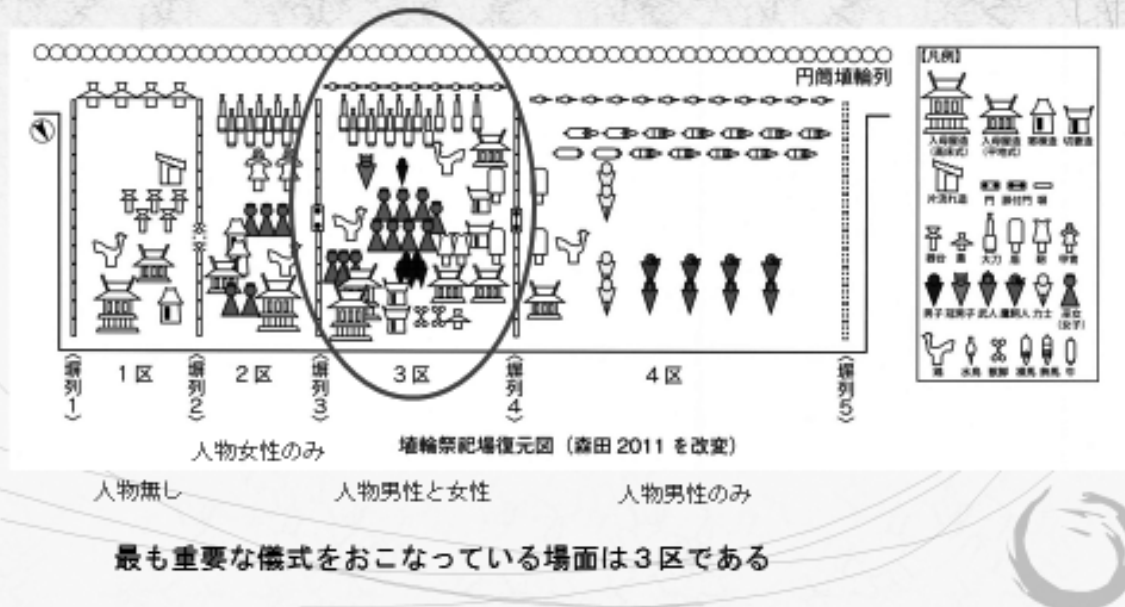
第7図 塚廻り3号墳の埴輪群像と中心人物

## 群馬県太田市塚廻り4号墳の埴輪



第8図 塚廻り4号墳の埴輪群像と中心人物

# 今城塚古墳の形象埴輪配置



第9図 今城塚古墳の埴輪群像

# 今城塚古墳の被葬者像？ 継体大王像？



第10図 今城塚古墳の坐像の男子

# 甲塚古墳出土遺物の重要文化財指定について

横須賀 倫達（文化庁美術学芸課）

## はじめに

平成 29 年 9 月 15 日告示にて、「栃木県下野市甲塚古墳出土品」は正式に重要文化財に指定された（考第 6 4 3 号）。未来へ残すべき重要な資料であるという普遍的な価値が認められたことになる。

## 1 重要文化財（考古資料）とは

### ①文化財保護法の規定

#### 第 2 条（文化財の定義）

この法律で「文化財」とは、次に掲げるものをいう。

- 一 建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍、古文書その他の有形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの並びに**考古資料**及びその他の学術上価値の高い歴史資料（以下「有形文化財」という。）

#### ※文化財の種類

**有形文化財** 建造物、美術工芸品（絵画・彫刻・工芸品・書跡・**考古資料**等）

**無形文化財** 演劇、音楽、工芸技術等、（“人間国宝”）

**民俗文化財** 無形（風俗習慣、民俗芸能・技術）、有形（衣服・器具・家具等）

**記念物** 史跡（遺跡）、名勝（庭園、山岳等）、天然記念物（動・植物等）

**文化的景観** **伝統的建造物群** ※ **選定保存技術**、**埋蔵文化財**

#### 第 2 7 条（指定）

文部科学大臣は、有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定することができる。

### ②考古資料の重要文化財

#### 文化財保護委員会告示第二号

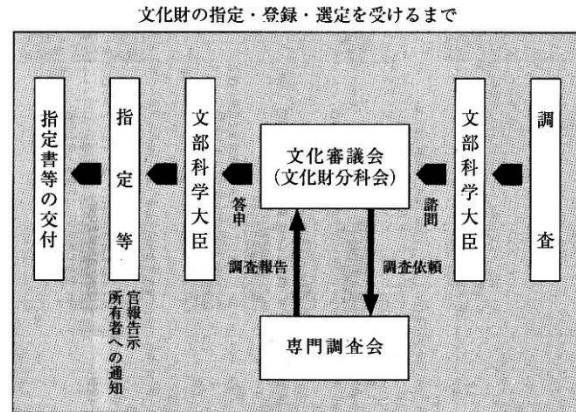
昭和二十六年文化財保護委員会告示第二号(国宝及び重要文化財指定基準並びに特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準)

#### 考古資料の部 重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鐸、銅剣、銅鉾その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 **古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの**
- 四 宮殿、官衙・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

## 2 指定までの道のり

- ①重要考古資料リストに登載
  - ・重要資料に関する懇談会（H26. 10）  
有識者4名と各都県の代表で議論
  - ・栃木県の資料は全7件を登載
- ②重要考古資料としての整理作業と指定調査（文化財調査官）、計8回
  - ・指定品目録作成
  - ・個別管理台帳の作成
  - ・指定に関する議案説明書
- ③文化審議会
  - ・諮問（H29. 2. 10）
  - ・専門調査会での審議（H29. 3. 1～3）  
10人の有識者に審議を委嘱
  - ・指定答申（H29. 3. 10）  
※東京国立博物館でお披露目展示（H29. 4. 18～5. 7）
  - ・官報告示（H29. 9. 15）



「栃木県甲塚古墳出土品」	下野市
1、機織形埴輪	2点
1、人物埴輪	17点
1、馬形埴輪	4点
1、須恵器	58点
1、土師器	16点
附 埴輪残欠	4点

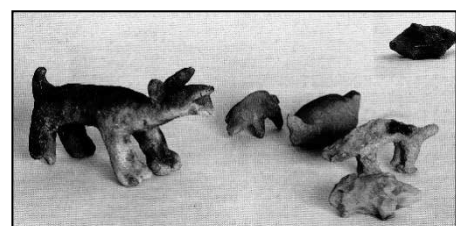
1, 機織形埴輪					2 点			
番号	長	幅	高	遺存率	品質形状等	出土位置	報告書 図番号	通番
1	73.2	42.0	(69.0)	80	<p>織機と機を織る人物。長円形の基台上部に有機台の腰機と機織りをしている女性人物を表現している。人物の頭部欠損。上衣裾の大部分欠損・基台天井部の大部分欠損、織機の一部部材を欠損。</p> <p>人物は、上衣と裳をつける。鬘及び両腕は残存するが、接点無く別置きとする（3パーツ）。左腕は肩部付近から手首まで残存。手首付近に腕輪を表現した粘土紐の一部と粘土紐の剥離痕あり。右腕は肩部から掌部まで残存。手指はすべて欠損。首に首飾りの粘土円盤の剥離痕あり。粘土円盤は残存しない。首飾りの下に幅約0.5cmの隆帯で襟元の表現。上衣は左前合わせで、粘土を貼り付け肥厚させて表現。襟元、胸下に結紐表現あり。胸下の結紐の一部に粘土紐残存。胸部には半球形の小さな粘土を貼付けた左右の乳房表現あり。上衣は、直径2.4cmの円形の工具を押圧した円文が、全面にほぼ均等に施されている。上衣は白彩痕、円紋内は赤彩痕残存。裳は腰部付近の表現がある。赤区画線内に白・黒を交互に配した市松模様痕残存。</p> <p>機台は2本の板状粘土で表現されており、それぞれ前後に脚が付く。脚はともに前方が長く作られ機台は全体が人物側に傾斜する。現代の有機台腰機という中筒受けや中筒は欠損、機台上に剥離痕のみが残る。招木受けは機台と接合するが、招木部は脱着が可能である。タテ巻具とタテ糸を表現した部材もあり、それぞれ脱着が可能である。</p>	図版 34・ 35・ 36・ 37・ 38・39 写真図 版26・	1	

指定書別添目録（一部抜粋）

## 3 栃木県の重要文化財（考古資料）

美術工芸品の重要文化財・・・124件  
うち、考古資料の重要文化財・・・8件

- ①銅腕 延元元年六月晦日奉施入ノ銘アリ（T8）
- ②下野国男体山頂出土品（S28、S51 追加）
- ③銅印<印文「鶏足寺印」>（S30）



藤岡神社遺跡の動物形土製品

- ④下野七廻り鏡塚古墳出土品（S61） 栃木市
  - ⑤深鉢形土器 栃木県那須郡西那須野町槻沢遺跡出土（H元） 那須塩原市
  - ⑥栃木県根古谷台遺跡土壙出土品（H2） 宇都宮市
  - ⑦栃木県藤岡神社遺跡出土品（H12） 栃木市
- 県内では17年ぶり8件目、古墳時代の資料としては31年ぶり2件目  
 ※下野市の重要文化財（美術工芸品）としては2件目

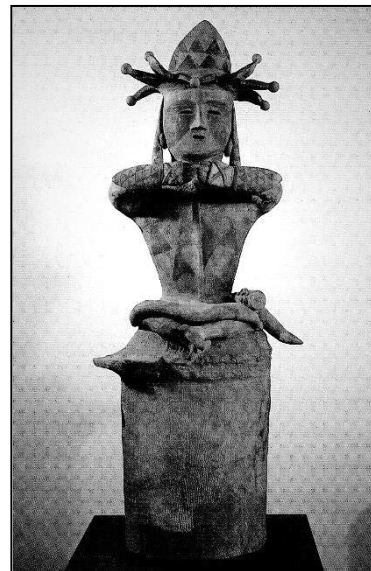
#### 4 重要文化財となった埴輪

##### ①埴輪の価値

- ・造形が優れている
- ・古墳時代の事物を具体的に伝える  
 建物、衣服、武器武具、道具
- ・古墳時代の葬送観念や時代背景（政治・思想・宗教・経済など）を間接的に伝える  
 埴輪群像、円筒埴輪

##### ②埴輪の代表的な指定品

- ・国宝 武人埴輪（東京国立博物館）
  - ・・甲冑・武器、優れた造形
- ・重文 天冠埴輪 神谷作古墳出土（福島県）
  - ・・天冠、文様、衣服
- ・重文 三重県宝塚古墳出土品（松坂市）
  - ・・船形埴輪 葬送観念
- ・重文 大阪府美園古墳出土埴輪（文化庁）
  - ・・家形埴輪
- ・重文 群馬県塚廻古墳出土品（文化庁）
  - ・・埴輪群像
- ・重文 埼玉県生出塚窯跡出土品（鴻巣市）
  - ・・窯跡出土、埴輪生産
- ・重文 奈良県メスリ山古墳出土（奈良県）
  - ・・巨大円筒埴輪
- ・重文 和歌山県大日山35号墳出土（和歌山県）
  - ・・両面人物・翼を広げる鳥形埴輪



天冠埴輪

#### 5 甲塚古墳出土品の評価

特筆されるのは、国内で初めて確認された二点の機織形埴輪である。このうちの一点は、楕円形の基台上部に機台のある織機と機織りをする女性人物を表現している。人物の頭部から胸部、基台天井部、および織機の一部を欠損するが、織機は国宝福岡県宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品にある「金銅製高機」に形状や構造が似る。他の一点は構造の異なる織機が表現されているが、織機と機織りをする女性人物ともに欠損部が多い。いずれも、古墳時代における織機の構造と多様性を明らかとする重要な資料である。

また、本件の埴輪は、墳丘上に埋置された状態で基部が出土し、配列と樹立方向が判明した貴重な例である。横穴式石室側から男性の人物埴輪、機織形埴輪を含む女性の人物埴輪、馬子とみられる人物埴輪と馬形埴輪の順で並べられ、機織形埴輪は石室方向に背を向け、人物埴輪は周溝側に、馬形埴輪は石室方向に向けて置かれていた。人物埴輪には、帽を被り、上げ美豆良で農具を右肩に担ぐ男性の埴輪や頭上に壺や箱状の容器を載せる女性の埴輪などがあり、種類も豊富である。四点ある馬形埴輪は、馬子とみられる人物埴輪を伴い、二点は装飾馬具が付く飾馬、他の二点は面繫のみを装着する裸馬を表現する。飾馬のうち一点には横座時の足置きと想定される短冊形水平板が表現されている。これら形象埴輪には彩色が残存しており、黒・灰・白・赤の四色が使われていた。



須恵器、土師器は形象埴輪列の外側、横穴式石室の西側約三メートル四方の範囲から集中して出土した。須恵器、土師器とも坏および高坏が主体であり、須恵器の甕や長頸壺が加わる。これらは古墳上における儀礼行為を具体的に示す。

以上本件は、古墳時代では他に例のない機織形埴輪に加え、古墳墳丘上における葬送儀礼を復元するうえで出土状況が明確であり遺存状態も良好な形象埴輪および土器類で構成され、高い学術的価値を有している。

①我が国唯一の機織形埴輪

- ・ 2種の異なる織機が存在を示す

1号・・・国宝“沖ノ島出土品”の金銅製高機（半岩陰祭祀（7-8C））に類似

部材／雀居、袴狭などの木製品

上細井稻荷山の石製模造品など

2号・・・部材／青谷上寺地、登呂などの木製品

➡織機の完成形表現における最古例

②彩色を含め遺存度高く、特徴的で種類豊富

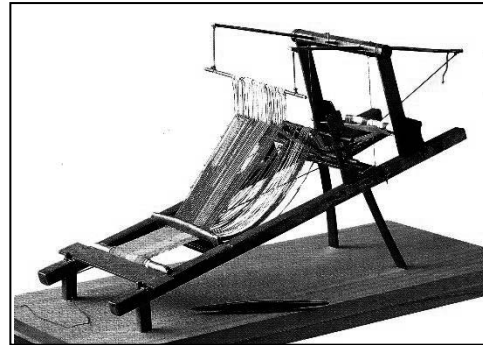
人物・・・円形文様の服（白地に赤）、

頭に合子、柄杓か特殊扁壺を持つ

飾馬・・・短冊形水平板、白馬、黒漆塗鞍

※彩色・・・黒＝磁鉄鉱、赤＝ベンガラ、

白＝白土



国宝沖ノ島出土品の金銅製高機

③位置や向きが明確で埴輪配列の復元が可能

・ 人物は正面、機織りは石室に背を向け、馬は石室方向を向く

・ 機織りを中心とし主に向かって左に女性と馬列、右に男性

・ 女性用の横座り馬、狩猟の場面や武人の表現なし

➡被葬者の性格を表すか

④土器を用いた祭祀行為の復元が可能

・ 約3メートル四方の範囲に高坏と坏、端に須恵器の大甕と長頸壺

➡大甕破片散在、破碎行為か。

【参考文献】 下野市教育委員会 2014 『甲塚古墳』

甲塚古墳出土遺物重要文化財指定記念シンポジウム

『よみがえる甲塚古墳』

～甲塚古墳の発掘調査によってわかったこと～

発行日 平成 29 年（2017） 11 月 26 日

発 行 下野市教育委員会

〒329-0492 栃木県下野市笹原 26

Tel.0285-32-6105

※本事業は、栃木県「わがまち未来創造事業」の補助を受け実施しました。





重要文化財 土器類



重要文化財 馬形埴輪